

梅花短大 家本 修 鳴門教育大 ○広瀬 月江
大阪府立科教センター 西沢 悦子

目的 前報において、被服の内容を再検討する必要があること。特に児童・生徒の衣生活実態に即した内容に再編成していかなばならないことが分かった。そのため、被服を他の領域と関連させ、衣生活を総合的に把握するような授業の仕方について、現在の家庭科教育担当教員がいかに認識しているかについての意識・実態調査を実施した。

方法 小・中・高校の家庭科担当教員を対象に質問紙・配票留置法を実施。実施時期は、昭和61年9月上～下旬。調査地域、大阪府下・徳島県下各公立学校1208校と422校、回収率は57.6%。主たる調査項目は、基本属性、現行の被服教育や実習内容及び教課審（中間まとめ）の項目、今後の指導方向や取り上げ方について質問項目など。

結果と考察 ①：今後の被服実習授業の仕方についての意識は、製作技能を実践的、演習的に取り上げながら、製作実習をさせる。（中・75.8%）②：製作実習の題材は、現行より軽減し、エプロンなどとする。（中・44.5%）と考えることが分かった。③：総合的な授業の仕方については、衣食住を相互に関連させた授業をすでに実施したものは26.6%、今後したいと思ったものは16.7%。④：被服と住居との融合的授業を実施したものの44.5%であり、かなり意識していることが理解できる。⑤：児童・生徒の興味・関心の高い「おしゃれの仕方」などを取り入れた授業をしたものは、37.7%、今後その様な授業をしたいとするものは、51.8%であった。⑥：これらから「おしゃれの仕方」や「身だしなみ」に関する内容は、児童・生徒の生活実態に即していると考えられる。⑦：また被服衛生的な方向にも関心が持たれている。（中・27.3%）